

見えないモノをいかに見るか

禅問答めいたコラムタイトルに戸惑われたらご容赦を。現在、西都原考古博物館では企画展 I 「藻塩焼く～日向の塩の考古学」を開催中である。塩は、あらゆる生物が生きていくうえで欠かせないもので、現在の私たちにとっても日常的に口にする身近な存在である。そんなありふれた塩を主題とした展示であるが、塩は空気中のわずかな水分でさえ吸収して溶けていくので、原始古代の塩そのものが残ることはほぼありえない。つまり主人公となるモノが不在なのである。

次の手段として、塩づくりに使用した土器やできた塩を運ぶ際に用いられた土器など、塩との関わりが深い資料を選んで展示を構成することになるが、実は古代日向の塩づくりに分かっていない点が多く、関連資料を見つけ出すのが意外に難しい。そこで、塩とは一見縁がなさそうな資料を組み合わせて、塩と人との関係を描いてみようを試みた。

一つ目の手がかりは、石器である。今回の展示では、旧石器・縄文時代の石器・弥生時代の石器が、それぞれどのようなセットで使用されていたか、比較できるように配置した。全体としては、時代が新しくなるにつれて、狩猟具主体のセットから農耕や土木工事に使用する道具が多数をなすセットへ変わっていくことが見て取れる。この変化は、主に動物性食料を摂取する食生活から植物性食料主体の食生活への推移を表している。動物や魚を食べれば、それらが生きるために摂取していた塩分を受け継ぐことができるが、穀物や野菜には基本的に塩分が含まれないので、別の形で塩を口にする必要が出てくる。このことが、塩づくりが広く普及した要因の一つと考えられるのである。

二つ目の手がかりは、馬である。『日本書紀』に「日向の駒^{ひむか}」の表現があるように、少なくとも記紀の編纂までには日向が名馬の産地として認識されていたことが分かる。また、県内各地の古墳で副葬された馬具や、馬を殉葬した痕跡が他の地域よりも比較的多く見られるので、古墳時代に馬の飼育が盛んであったのはほぼ間違いない。馬をはじめとする草食動物は、植物のみを口にするため、塩分欲求が非常に強い。優れた馬を育てるためには、塩を常備しておく必要がある。会場では、馬に装着されたさまざまな馬具を展示しているが、それらできらびやかに飾られた日向の駒の姿、またその背後に名馬を養うために、塩を求めた人々の姿を想像いただきたい。

最後に、企画展の開催にあたっては、熊本県教育委員会から製塩土器の貸し出しをうけるなど、多大なご協力をいただいた。県内初公開の資料であり、一見奇妙なその形は塩を得るために考え抜かれた知恵の結晶である。地震からの復興は端緒についたばかりであり、今後も様々な形での支援が必要となってくるが、熊本の先人たちの知恵や熱意に触れ、いま私たちになしうることは何か、考える機会としていただければ幸いである。

(堀田孝博)



県内各地出土の旧石器



さまざまな馬具